

第29回区民車座集会意見交換内容（麻生区）

- 1 開催日時 平成29年5月26日（金） 午後3時から午後4時55分まで
- 2 場 所 麻生区役所4階 第1会議室
- 3 参加者等 参加者21名、傍聴者10名 合計31名

<開会>

司会：皆様、それでは、定刻となりましたので、ただいまから第29回区民車座集会を始めさせていただきます。

私は、本日の司会を務めさせていただきます、麻生区役所地域振興課の岡村と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

今回は、「芸術・文化のまちづくり」をテーマに、麻生区で活動されている団体や大学の皆様にご参加いただきまして、取り組みの発表をしながら、意見交換を進めていければと考えております。

本日発表いただきますのは、お手元の次第にもございますとおり、NPO法人しんゆり・芸術のまちづくり様、NPO法人KAWASAKIアーツ様、劇団民藝様でございます。

また、本日ご参加いただいている皆様は、麻生区で芸術・文化活動に関係する団体の交流や情報交換の場として開催しております「あさお芸術・文化交流カフェ」に参加していただいている団体の皆様にお越しいただいております。

次に、行政からの出席者を紹介させていただきます。

福田紀彦川崎市長でございます。

市長：どうぞよろしくお願いいたします。

司会：北沢仁美麻生区長でございます。

区長：どうぞよろしくお願いいたします。

司会：それでは、開会に当たりまして、福田市長からご挨拶を申し上げます。

市長、よろしくお願いいたします。

<市長挨拶>

市長：改めまして、皆さん、こんにちは。

今日はもう29回にもなったんだと思いましたが、29回目の区民車座集会ということで、きょうは麻生区らしいテーマだなというふうに思いました。芸術文化のまちづくりについてということで、ここに集まっただいただいている皆様、交流カフェを通じて横のつながりができたというふうに聞いておりますけれども、私、この麻生区出身でございまして、小さいころは麻生区役所もなかった、本当に山だったところから、こんなにも文化・芸術のまちになるとは、もう当時は予想だにできなかったですけれども、やっぱり文化って誰かにつくってもらうものじゃなくて、ここにいらっしゃる方初め、多くの区民の皆さんが自分たちでつくり上げてきたというふうなことだと思います。

それがこういうふうな形になって、麻生に住んでよかったなというふうに思えるような、文化芸術のまちになってきているんじゃないかなというふうに思っています。

先日、アルテリッカしんゆりも終わりました、過去最高の参加者数というふうに聞きましたけれども、さ

つき麻生区長にも聞いたんですけれども、何よりやっぱり一番うれしかったのは、ボランティアの数の皆さんが、これまた過去最高で170人を超えたというふうな話で、これが麻生区の言葉を選ばずに言えば、文化度の高さというか、やっぱりすばらしさのあらわれの一つの形かなというふうに思っています。

こういったことが、もっともっと花咲くように、これからも、もっとみんなで連携よくやっていきたいというふうに思いますし、今回の車座集会をきっかけとして、私も皆さんからいろんなことを教えていただきたいと思いますし、きょうここに出席させていただいている行政の職員もそうですし、あるいはお互いに学び合ってヒントがあるという、そういう気づきの会にもなったらありがたいなというふうに思います。

麻生区は本当に文化・芸術で、7区の中ではある意味突出しているところだと思います。きょうもインターネットを通じて観ている方もいらっしゃるし、麻生区ってこんなことをやっているんだという、ほかのところにもいい火つけ役というか、いい形で飛び火することになれば、区民車座集会もまた良い形になるのではないかなというふうに思っています。

きょうもどうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

<意見交換>

司会：ありがとうございました。

それでは、まず麻生区の芸術・文化のまちづくりについて、これまでの経緯を振り返っていききたいと思います。

新百合ヶ丘を中心に芸術・文化のまちづくりに取り組んでいるNPO法人しんゆり・芸術のまちづくりの白井様から発表をお願いいたします。

白井さん：最初ですので、ちょっと緊張しておりますが、皆様方のほうが芸術・文化の今までの経過、つくり上げてこられた方ばかりですので、ご存じの方がたくさんいらっしゃると思いますが、ちょっとおさらいということで、これがちょっと違っているよというところは、また各団体の方、これからお話しただけると思うんですが、少しフォローしていただければと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、芸術・文化のまちづくりということで、まず、ここに書きましたのは、「新百合ヶ丘、麻生を住みたい街、住み続けたい街にするために」ということで、なぜこういうことをやっているかというのが、だんだんと皆さんのお話の中に出てくると思いますので、タイトルとしてこんな形をつくらせていただきました。

これまでの歩みの中で、麻生区が誕生してもう35年くらいになりますが、その中で、まず麻生市民館を、この区役所もそうなんですけれども、その当時つくろうという中で、麻生市民館をつくるという中で生まれたのが、麻生フィルハーモニー管弦楽団。きょう、岩倉さんもいらっしゃいますが、それから、麻生合唱団の設立というところ。それから、第1回の麻生音楽祭というのは、もう当時から、1985年というふうに書いてありますが、もう市民館ができて、区民館ができて、もうすぐこういう芸術活動を区の中の皆さんがやられたと。

なぜかといいますと、この地域、本当に前から、この区が多摩区から分かれる前から、芸術家の方ですとか、音楽家の方がたくさん住んでいらっしゃったという経緯がございまして、すぐこういう動きになったというふうに聞いております。

それから、その後、日本映画学校、現在は日本映画大学ですが、それが移転開校ということで駅前にできました。

さらに、昭和音楽芸術学院、現在、昭和音楽大学さんですが、こちらのほうも移転開校ということで、こういう学校さんも駅の近くにできるということで、非常に芸術の色が濃くなってくるというような時代がございました。

それから、「芸術のまち構想」というのが、相当大的な構想があったようですが、いろんな大劇場をつくらうとか、そんなこともあったようですが、そういった中で芸術のまち構想というのがありまして、それから、しんゆり映画祭というのもこの当時から始まっております。これが1995年ですか、第1回ということで、皆さんから後で詳しくは話していただけると思うんですが、それから、アート市というのが同時にこのときに、今もちょっと形を変えておりますが、アート市やっておりますが、こんなことをやって、芸術のまち構想というパンフレットまでつくって、非常にこの時代を一時盛り上がりを見せました。

それから、新百合ヶ丘「第2のまちびらき」ということで、昭和音楽大学さんが本体が移転をされました、これが2007年ですか。それから、アートセンターが開館ということで、これも私も開館に当たっていろんな協議会等参加させていただいたんですけれども、いろんな議論がございました。その芸術のまち構想という中から、コンパクトなものになりましたけれども、そこから情報発信を、芸術関係の情報発信をしようということで、ああいう形になりましたけれども、そういったものができる。

それから、10年前になりますが、k i r a r a @アートしんゆりとか、アルテリッカというようなイベントも始まりました。これも芸術の一環としてこういったことで高めていこうということ。アルテリッカというのが、いつもアルテリッカの方々からご説明あるところですが、「リッカ」というのは「豊か」という意味で、「アルテ」というのが「芸術」、寺川さんいらっしゃいますので、寺川さんが産みの親でございまして、そういう豊かな芸術をここで展開をしようという動きも同時にやってきております。

「しんゆり・芸術のまち」、それからアートセンターのことも含めて、芸術のまちをPRしようということで、川崎市さんも非常に力を入れていただいて、PR委員会というのをつくっていただきました。これ1年だったんですけれども、その中で非常に組織的に動こうということで、いろんな企業、団体と、それから役所の方も参加されてきております。

それから、同時にしんゆり・芸術のまちづくりフォーラムという組織をつくりまして、これにもいろんな団体の方が参加されて、私どもは比較的若い、もう若くはないんですけれども、若い者がしんゆり・芸術のまちNPOというのをつくりまして、そこでいろんな情報発信、芸術関係の情報発信の受け皿とか、そういうことをはじめて現在に至っております。

これちょっと表ですが、芸術・文化の主な歴史と、今ずっと話をしましたが、麻生区の誕生から35年近くたっておりますが、すぐ先ほど申し上げたように、麻生フィルに始まりまして、途中段階でいろんなことがありましたけれども、こういうのを脈々とこの地域の方に盛り上げていただいて、ここまで芸術・文化というのが歩んできております。

これ、ご存じの方、たくさんいらっしゃると思うんですが、おさらいを兼ねて今、発表をさせていただきました。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

司会：白井様、ありがとうございました。

それでは、こうした経緯の中で作られてきた芸術・文化のまちで、現在、実際に活動されているいらっしゃる団体の皆様から、テーマごとに事例発表をいただきながら、意見交換を進めていければと思います。

初めに、今年の秋で23回目を迎えます市民手づくりの映画祭、「KAWASAKI しんゆり映画祭」を運営するNPO法人KAWASAKI アーツの大多喜様から、「芸術・文化を通じた地域の活性化」というのをテーマに発表をお願いしたいと思います。

大多喜様、よろしくお願いいたします。

大多喜さん：今日はお時間いただきましてありがとうございます。

私どもKAWASAKI しんゆり映画祭、1995年から始まっております、今年で23回目を迎えます。まだ新百合ヶ丘に映画館が一つもなかったときに始まっております。「市民」と書いて「みんな」と呼

んでおりますが、私ともう一人だけが有償スタッフで、ほかは本当に9割、10割ほどボランティアスタッフで運営している手づくりの映画祭となります。

秋の本祭のほかに夏の野外上映会。中学生が映画をつくるジュニア映画制作ワークショップ、そして、秋の本祭、そして、バリアフリーシアター、この四つの柱で活動しております。

ジュニア映画制作ワークショップなんですけれども、中学生の手でシナリオから映画関係まで、もうキャスティングから撮影、編集も含めて、全て中学生の手でつくっております。それを日本映画大学関連の映画制作のプロの講師やボランティアスタッフがサポートしまして、中学生につくっていただいております。

これが本祭での上映の様子ですね。

夏の野外上映会、こちら麻生区地域課題対応事業で行っておりまして、去年はちょっと雨だったので500名程度だったんですけれども、晴れのときは1,000名程度のお客様に来ていただいております。夏の終わりに一日無料上映会を行っております。去年の作品ですね。上映の前に模擬店などを開いております。夏祭りとして地元の方に親しんでいただいております。

バリアフリーシアターですね。こちらは中途失明の市民の方からお電話がかかってきて始まったんですけれども、こちらでも市民スタッフが手づくりで副音声のガイドを制作しております。当日FMラジオでサービスを提供するところまで行っております。

そして、こちらの映画会での活動が発端となりまして、アートセンターで、通年を通してのバリアフリーのサービスの基盤になりました。それと、子育て中のお子さんをお預かりしてのこういったサービスも行っております。

そして、秋の本祭ですね。ちょっと駆け足ですみません。

1995年よりスタートしまして、秋に毎年1週間から10日程度で実施しております。上映のほかにゲストトーク、ミニコンサート、ワークショップや交流会、地元のお店とカフェなども開いております。

場内スタッフ、チケット販売、そして会場装飾など、全て市民スタッフが賄っております。

こちら、先ほどから市民スタッフが中心となって取り組んでいるんですけれども、もちろんお客様であります地域住民の方、地域の企業、団体、商店、そして地域の大学、そして川崎市、麻生区といった行政のいろんな方の力をかりながら一緒に運営しております。

例えば、野外上映会上映前に地元の昭和音大の学生さんによるイベントの演奏だったり、地元の劇団の寸劇を行ったり、行政さんの力をおかりして、広報の展開をしたり、企業のスペースをお借りしてポスター展を展開したり、地元のお店とメニューなどを考案して、カフェを展開したりといったことを行っております。現在こういった団体の皆さんと一緒に行っています。

市民がつくる映画祭になったのが、第2回目にボランティアを募ったところ、結構わっと集まったそうにして、そこから先ほどのバリアフリーシアター、ジュニア映画制作ワークショップ、なつやすみ野外上映会が派生して行っております。

そして、市民ボランティアがどんどん積極的に看板をつくりたいとか、この映画を上映したい。この監督を呼びたい。こういうふうに宣伝したいということで、どんどん積極的な声から活動がどんどん展開しております。今現在も毎年の上映作品も市民スタッフがみずから選んでおりまして、それがプログラム委員会というところで選ばれているんですけれども、さらに運営も自分たちでやろうということで、運営委員会というものができておりまして、市民みずから映画祭を運営しているという映画祭になっております。

こういった手づくりの美術、ボードだとか、看板だとかというのは、しんゆり映画祭の一つの特徴なんですけれども、こういったことは今も続いております。

それから、地域や専門家との連携なんですけれども、先ほど申し上げたように、地域のお店と一緒にシネマウマカフェや野外上映会で出店して盛り上げたりだとか、それから、専門家という点では、ジュニア映画制作ワークショップに現場のプロの方に指導講師や技術サポートに入ってもらったり、使用する機材をプ

ロ仕様のものを映画大学さんのご協力で使用させていただいたりしております。

それから、その道の現役で活躍する方々ですね、監督・俳優・脚本家・評論家の皆様をお呼びして、作品の理解を深めるためにお呼びしております。

「プロボノ」を活用したイベントの運営分析とありますけれども、プロの方にボランティアとして運営のご相談に乗っていただいたりもしております。

これからの課題といったところなんですけれども、市民ボランティアの確保ですね。先ほどアルテリッカさんがすごくたくさんふえているという話があったんですが、非常にやっぱりボランティアなので、流動的でもありまして、やはり個々のいろんなお仕事やご家庭のご事情とかで、安定していない部分もありまして、特にしんゆり映画祭は企画から運営までやるので、結構ハードといえはハードで、ディープなところまで市民が活躍できる場ではあるんですけれども、そういったところもありまして、どう新しい人を発掘していくか、どうニーズとつなげるか。また、特典があるから参加しようという人が割と最近ふえてきておりまして、そういうところとのバランスとかも模索していかななくてはいけないなと思っております。

2番目ですね。情報発信の工夫で、来場者が減ってはいないんですけれども、割と落ちついてしまっているといえますか、毎年2,500名くらいの方に来ていただいているんですけれども、どうすそ野をさらに広げていくか、発信していくということは課題になっております。こういったチラシの紙媒体ですね、のほかに、これもスタッフがつかって運営していますけれども、公式ホームページ、フェイスブック、ツイッター等で展開しておりますけれども、そのほかにもいろいろな展開を模索していかななくてはいいかなと思っております。

それから、3つ目が資金の確保に向けて厳しい運営資金とありますけれども、私ども市から大きな援助を受けて進めてきているんですけれども、毎年減っていつている財源をどう補い、どう確保するかということで、今、いろいろと考えておりまして、経費削減できるところをしようということで、会場をまずっと南口のイオンシネマさんでもやっていたんですけれども、そこをちょっとやめて、アートセンター1本に絞ったりだとか、それから、上映放送を少し減らしたり、広報宣伝を外部委託していたところを、そこも自分たちで頑張ろうということでやったりと、経費削減をしているんですけれども、今現在ちょっと事務局機能が維持できるかどうかというところまでちょっと来ておりまして、何とかしようということで、メセナ制度を活用したり、クラウドファンディングを活用したり、企業スポンサーの協賛獲得に市民スタッフも奔走しているんですけれども、ちょっと本当にボランティアがほぼほぼやっている団体なので、ある程度限界が今、見えてきておりまして、ぜひほかの皆様のお知恵もかりながらやっていきたいなと思うんですけれども、今まで続けてきまして、これからもこのまま続けたいという、もちろん皆さんいろんな団体もあると思うんですけれども、新百合ヶ丘の街と一緒に育ってきて、育てられてきた映画祭だと思ひまして、20年、ことし23年目になりますけれども、ここからまたさらにこの文化交流カフェも始まって、横とのつながりが少しずつふえているんですけれども、ここから新たにもう一回、もっと大きな視点で、芸術と街といろんな視点からちょっとつながり直すというか、少し大きな波がもう一度起こすようなときなのかなということをやっと感じておりまして、市民と積極的にほかの外のつながりをつくろうと、個人でも動いているところでございます。ぜひ皆様のお知恵もおかりしたく、さらにいろんな方とつながって活動をしていければと思っております。

ちょっと早口ですみませんでしたが、御静聴ありがとうございました。（拍手）

司会：大多喜さん、どうもありがとうございました。

それでは、これからの意見交換につきましては、市長に進行をお願いいたします。

市長：大多喜さん、ありがとうございました。

知っている部分もあったんだけど、知らない部分もあったりして、やっぱり聞いてよかったという感じがしましたけれども、それこそ20年前、15年以上前ですけども、その小学校に行って、私も野外映画祭を観に行ったりしてというのが、これがずっと続いていることというのは、すごいことだなというふうに素直に思っていますし、こういうものが映画館じゃない、映画なんだけれども外で観るとこんなにもまた違った見方ってあるんだなというのを気づかされたという意味では、すごく楽しいし、多くの人に経験してもらいたいなというふうに思っています。ありがとうございます。

これ映画大学の人たちとのコラボレーションという意味では、いろんな形でやっておられるというふうに聞いたんですけども、学生の方たちですね、映画大学の、のボランティアの人たちというふうなのは、この市民スタッフの中には結構入っておられるんですか。

大多喜さん：昔のほう結構たくさんいたようなんですけども、最近、もちろん映画大学の学生さんもボランティアで参加していただいているんですけども、スケジュールのこともあってなのか、結構、実習と重なっているということだとか、あと、皆さんアルバイトですごく忙しい方が多くて、全くいないわけではないんですけども、もっと参加してほしいなとは思っています。

市長：今までこの市民スタッフの方って、どういうやって集めてこられたんですか。

大多喜さん：行政のいろんな公的な施設に置かせていただくチラシを中心に、ホームページだったりだとか、割と地道なチラシ中心の広報でやっているんですけども、市政だよりも載せていただいたり。

市長：ええ。この前も佐藤忠男先生と話をしていたときに、いや、しかし、この日本全国で、いわゆる言うてはいけない、マイナーな映画がこんなにも館を埋めるところというのは、全国見渡してもアートセンターくらいしかないと言って、自信をもっておっしゃっていたんですよ。それって、すごいことで、こういう観る側から、いわゆる参加してもてなす側に転換するという、何らかのきっかけが多分あるんじゃないかと思うんですけども、何かありますか。いきなりどうやったらいいんだろうって、いいアイデアをもっている方いらっしゃいますか。あるいは、大多喜さんもこんなことを考えているんだろうとかというふうに思っていることとか、何かそういう転換をされた方いますか。お客さんがスタッフ、ボランティア側に転換して、それがこういうアイデアがあるんじゃないのとかという方いますかね。今、あるいはそういう努力もされていると思うんですけども、何か難しさって感じますか。

大多喜さん：もしかしたら、もっと年間を通じて、今、募集時期に募集しているという感じなんですけれども、もっと年間を通じて、それこそずっとアートセンターで何か映画祭コーナーみたいなものを置かせていただくとか、そういうことだとか、それから、映画にふだんから親しんだりしている方に、もう少し長いスパンで働きかけてもいいのかなと、ちょっと今お話を聞いていて思いました。

市長：それはいいかもしれませんね。お客さんには常にボランティアスタッフのチラシというか、募集のチラシがもう毎回、意外とリピーターが多いというふうに聞いているので、そういうことからすると、今度はやってみようかなという気になってみたらいいかもしれませんね。

大多喜さん：私も実はボランティア出身なんですけれども、その前はお客だったんですけども、でも、ボランティアになるまでにはやっぱり数年ありましたから、やり続けることも必要だなとは思っています。

市長：ぜひこれは通年の話というのは、この話ぜひ詰めたいですね。隣の池田さんに話すのが一番早いんですかね。池田さん、いかがでしょうか。

池田さん：検討させていただきます。

市長：ぜひ前向きに取り組んでいただければありがたいなと思います。

それから、やっぱり事務局が維持するのも非常に大変だというのも、どこから資金を調達してくるのかというのは、これはもうあるゆる市民活動をされている方たちの共通の悩みだというふうに思うんですけども、僕もいい知恵があるわけではないんですが、どうぞ、家安さん。

家安さん：資金ですけども、ボランティアというと、よくいろんなお手伝いをするというふうに、それはもちろん大事なことで、大切なことなんですけど、もう一つは、僕、アメリカに行った経験で言いますと、実は、それはオーケストラですけども、ボランティアが自分たちでいわゆるファンドレイジングするわけですけども、パーティーを開くとか、それから、昔で言えば今はオークション、そういうふうにして物を売る、それから人を集める、そこにお金をとる、それを寄附していくというのを、非常に大がかりにやるんですね。今はお手伝いとか、あるいは仲介者みたいになっていますが、これは難しいことなんですけども、実はボランティア自身がある一つの活動をもってお金を集めていくんだと。それも自分たちのある程度やれることですけども、ファンドレイジングという考え方をもってパーティーを開くとか、イベントをやるとか、そういうものもあります。なかなかそこまでやるのは大変でしょうけど、一つのボランティアの発展系としてはあるんじゃないかなという気がします。

市長：シネマウマは、物すごくいいキャラクター。キャラ立っていますよね。

大多喜さん：ありがとうございます。

市長：一度かぶらせてもらいたいと思うくらい、すごくいい。

大多喜さん：ぜひかぶっていただきたい。

市長：物すごくいいキャラだと思うんですけども、ああいうシネマウマキャラをバッチみたいなのを売るとか、神奈川フィルがブルーダル基金とかというので、ブルーダル君というふうなバッジをつくって、かわいい、なかなかブルーダルってかわいいキャラなんです。そのバッジを売りまくって資金を稼いでいるというふうなのも聞いたことがあって、家安さんおっしゃったような、そういうパーティーと組み合わせるとか、何かおもしろいかもしれませんよね。

これ市民による市民運営の映画祭って、余り僕も聞いたことないんですけども、ほかの全国でも珍しいケースですかね。

大多喜さん：そうですね、ここまで本当に運営部分に市民が深くかかわっているものは、結構、ここまでは余りないかなと思います。

市長：そういう意味では、全国であるこの映画祭みたいなのでも、特徴的なことから考えると、よくシンポジウムなんかで来ていただけるような、何でこんな有名な方が来るんだろうという、すばらしい方がお見え

になっているじゃないですか、監督さんとか。そういう方とかにグッズを出してもらって、オークションで売るとかあるかもしれませんよね。そういう映画ファンには、もうよだれが出ちゃうような、そういうものを高額で売るというのもありかもしれませんね。

大多喜さん：なるほど、その発想はなかったですね。

市長：だって、すごいですものね。有名な監督とか、俳優さんとかというのは、来ているのパンフレット見てしんゆりに来るんだという、ちょっとすごさを感じるので、そういう方法もあるかもしれませんよね。

でも、こうやって家安さんからおっしゃっていただいたような、横のつながりからこんなやり方があるんじゃないのというふうなもの、これも交流カフェを通じて出てくると、できること、できないことがあるかもしれませんけれども、その中でできることをやってみるというのもいいかもしれないですよ。

一つボランティアの募集については、隣の池田さんが解決できそうな雰囲気が出てきましたので、今日の区民車座もいい感じになってきていると思います。

大多喜さん：ありがとうございます。

市長：ありがとうございました。

次の発表者の方、どうなりましたっけ。

区長：今の意見に関して…。

市長：失礼しました。僕の回しが悪かったです。

今の事例について何か、皆様方からご意見などいただけましたら。ご質問でも結構ですけど。

はい、岩倉様。

岩倉さん：市民から生まれたという意味では、音楽祭の実行委員長も来ているので、まさに麻生区が出来たばかりの時から、市民たちが勝手にですね、音楽祭を今までやってきているところもあるので、その辺のお話を聞くと面白いかなと思います。

市長：岩倉さんがしゃべるのかと思ったらふりだったんですね。お願いします。

横須賀さん：ありがとうございます。

麻生音楽祭実行委員会から参りました、横須賀と申します。実は私麻生フィルのメンバーでして、麻生音楽祭一番最初の日からいます。岩倉さんもしましたけど。この麻生音楽祭というのは、その何か、私が一番最初のきっかけのところではちょっと携わってないんですけど、年末に何か、新百合の南口のバスロータリーのところで何かちょっとイベント、音楽会みたいなものをやったらしいんです。ちょっと、私、弦楽器なもので、そんな年末の外なんて寒くて、私、弾けないわとかいって出ませんでしたけど。

それから、もっとこれを楽しくやろう。それで市民館もできるから、市民館でもっと楽しく、いろんな分野の人たちが音楽会をやったらどうかというのが反省会に出たらしくて、それで何か麻生音楽祭ができ上がったと聞いておりますが、そのときに、その麻生音楽祭にするにはというか、やるためには、自分たちだけじゃなくて、学校も巻き込んだほうが良いと考えてくださったそうで、第1回の麻生音楽祭は2日間にわたって、スクールの部門と、それから、大人の部門とありました。

で、やっていって、それでやっていくんですけども、5年ぐらいたったときに、区役所が自分たちもとか言ってくださったので、形がちょっと変わっていきました。

今はもうことし32回になるんですけども、ずっとこう考えてみてみると、その時々状況に応じて、新しいことを取り入れていったなと思うんですね。その区役所が来たいと言ったら、区役所、こちらは本当、大歓迎ですけど、区役所と一緒にやっていく。それから、昭和音芸がこちらのほうに入ってきた。だったら昭和音芸も入れ込んでしまう。ちょっと、映画大学はちょっと入れ込めなかったんですけど。そういうふうにして、どんどん新しいことをやっていく。

それから、考えてみると、そのスクールを巻き込んでしまったということのいいことは、スクールコンサートに出ていた方々が、自分たち卒業しちゃってから、コーラスのグループをつくったり、アンサンブルのグループをつくったりして、それで、麻生音楽祭に出たいと参加してきてくださって。だから、ずっと大人ばかりじゃなくて、若い人たちもまたここで楽しかったことを続けていきたいという、そういうふうにならなくて若い人も入っていく、そういうふうなこともあったかなって今は考えております。そうですね、そんなところかな。

市長：ありがとうございます。

文化協会の菅原さん、もう長い、この32年、30年を超えてということで、このあたりのノウハウをお聞かせいただいて、課題もあると思うんですが、ちょっと活動の中から見えてきたものというふうなのを共有していただけるとありがたいです。

菅原さん：30周年を迎えて、35年にもなりますが、どちらにせよ、何が一番、今、映画のを聞いてね、それから、うちの文化協会も、なぜこうやって生き残ったり活動ができるかというのは、事務局を置くことができる場所、うちは市民館の中に事務局を置かせてもらっているんです。1室あります。そこは幾つものグループが使っていますが、拠点があります。

それから、映画もそうですよね。トゥエンティワンやあそこを1室借りてごらんない、自分のお金で。大変なお金なんです。でも、それは多分、無料でね、トゥエンティワンを……。

大多喜さん：無料じゃないです。家賃払っています。

菅原さん：自分で払っているの。ああ、お金払っているんですね。あそこね、1年間、ずっと占領して使っているんですよ。だから、みんなね、占領してなんて言うのも悪いけど、そういうわけではなくて、要は事務局を置く場所がきっちりあって、そこを活動の拠点にできるということは、うちにとってもすごくありがたいことであり、やっぱり、この30年以上も続いている理由だというふうに思います。

でも、だんだん30年もするとね、映画もきっと同じなんだと思いますよ。最初は、新しいことはぱつと飛び込みますよね。そして、つながってきます。でも、活動を見るとすごい1年間活動しているんです。だんだん、みんな長くなってくると、それはつらくなっちゃうんですよ。

だから、その拠点拠点のところの活動にポイントをどう置いて、そこにボランティアをぱつと集めるかということも、すごく大事だなというふうに思っています。

うちのほうあさお古風七草粥なんかは1,000人も来るわけですよ。そして、1,000食出ですよ。それで、これはもう地域に定着してますから、そういうふうにならなくて何か何かこうポイントになるところで大きなイベントがしっかり位置付いていけば、それなりにいけるかなというふうに思っています。

でも、私たちもね、この30年して、どういうことをテーマにしているかというと、「新しい風と創造」、これがうちのテーマなんです。30年を迎えて。31年目から「新しい風と創造」、これがテーマで、

ことは何かといえばね、市長さん、麻生区は今ね、どれだけの外国の人がいると思います。何カ国から来ていると思います。知っています。麻生区はね、今は71カ国の人がいるんですよ。71カ国、子どもたちも含めて2,121人が住んでいるんです。2,000人以上が住んでいるんですよ。

だから、麻生区と言えども、もう国際的な場所なんですよ。もう少しやっぱり視野を広げていかないとね、いつも自分のところ、自分のところ、私たちも自分のところやりたいですよ。でも、この範囲ではだめなんですよ。もっとグローバルに、やっぱり71カ国の人はどう働きかけて、この麻生区の文化を見てもらったり参加してもらえるか、子どもたちに2,121人もいるんですよ。その子どもたちにどう参加してもらえるか、親も含めてね、麻生区を知っていただく、そういうことがすごく今はうちはテーマで頑張っているところです。

以上です。

市長：大変力強い……。いや、これから30年を迎えて、さらに新しい風をありがとうございます。あらゆる文化団体をまとめていただいている会長としては、大変力強いご挨拶、ありがとうございます。

鈴木さん、合唱団、新しい風はいかがでしょうか。

鈴木さん：逆に狭い範囲で申し上げます。今、昨年のプログラムを配らせていただきました。そこに第25回定期演奏会なんですが、創立30周年記念でした。30年、一番最初の画面に麻生合唱団を載せていただいてありがとうございます。

その設立当時からの私も団員でございまして、やはり麻生合唱団には70人ぐらいになっていますけど、一番多いときは120人でした。団内結婚ということがあったほど、若い世代がいらっしゃった世代がありました。

ところが、今のすごく問題は、合唱祭とか音楽祭、麻生合唱祭とか音楽祭があるときに、たくさん若い方がそのときには出演してくださるんですけども、麻生区で唯一、オーケストラと演奏のできるというコンセプトの合唱団なんですが、そういう大きな合唱をしてみたいなという人たちの受け皿のつもりでいるんですが、案外若い人が入っていらっしゃらない。多分、お忙しい、この世の中が若い人にとって物すごくお忙しいのかなと、そんな感じもいたします。

それから、その中でもちょこっと顔を出していただくようなこと、これは麻生合唱団の反省点としてアピール不足だと思っているんですけども、麻生合唱団として一番恵まれているのは、練習会場が川崎青葉幼稚園という固定の場所がお借りできている。これがないと、ここまで30年続けるのは大変だったと思います。その幼稚園のイベントがあるときには、1年前に抽せん会に行って練習会場を確保したりしなければいけない。それが年に数回だけで済んでいる。拠点があるということのありがたさと、それから、演奏会についても、麻生市民館や中原市民館もお借りするんですが、優先申請という対象に何年か前からさせていただいて、1年半、18か月前に場所が確保できる。

プロの指揮者の方だとかソリストの方は、18か月前にはもう全てのスケジュールが決まってしまう。それが、もう今は確保できているということが、なおさら活動そのものはしやすくなっている。あとは、我々の努力でもっと若い人に声をかけて、どういう方法をとるか、今、ホームページというものは使わせていただいていますけれども、もっと何か若い人を巻き込んで、もっと、それこそ30年たちましたから、これからまた一歩かなということ考えております。

市長：ありがとうございます。それすばらしいです。ありがとうございます。

今月、市民合唱祭があつて、これはもう毎年のイベントなんです。僕は一番楽しみにしているイベントの一つなんですけども、2日間にわたって、市内100団体を超える合唱団が、ミューザ川崎シンフォニ

一ホールでやると。

そこで若い人たちの合唱団というのは、実は幼稚園のお母さんとかが幼稚園単位とかでコーラスグループをつくってやっているんですよね。でも、あれ卒業しちゃうと、あそこで結構断絶しちゃっているというのはありますよね。ちょっともったいないなという感じがするんですよね。

ですから、その若いママさんコーラス、若い幼稚園のお母さん、ママさんコーラスと、意外とかなり年配の方たちの合唱団みたいな形になって、少し年代的にはこのM字カーブ的なのがあって、でも本当は音楽を楽しみたいよね、経験したいしというふうなところを、どうもうまく捉え切れてないんじゃないかなというふうなのは、それは鈴木さんのところだけじゃなくて、みんな、この文化芸術活動のところってそうですよね。30代、40代、50代の何か働き盛りのところって、どうしてもやりたいんだけど遠ざかってしまうというのがあるんだけど、うまく接続ができればですね。

ですから、何かこう幼稚園のところのママさんコーラスのところに、もう青田買いじゃないですけど、何となく事前にこの連携というか、ああいうつながができれば、その中からやれる人というのも出てくるかもしれないですね。何かそこが課題かなという、合唱団だけじゃなくて、何となくそんな課題だなというふうに思っているの、このつながをみんなで工夫できればいいんじゃないかなというふうに思っています。ありがとうございました。

では、次のテーマでいいですね。

植木さんのところからもご発表いただく、失礼しました。すみません、植木さんのところでいろいろご発表をいただいていいですか、それこそ……。

植木さん：はい。もう20年、30年というお話が出てきておりまして、我がやまゆりはやっと10年を迎えたということで、何か肩身が狭いようでございますけど、先ほど来、ボランティアという話が出ておりますので、地域の人材とその活動のマッチングということについて何か報告をしろというご指示をいただいておりますので、そこら辺につきましてお時間を頂戴したいなというふうに思っております。

やまゆりでは10年前から毎年ですね、「目指せアクティブシニアのセミナー」というものを開催をいたしております、定年退職者、それから、子育てを終えた主婦の方々の地域デビューのお手伝いをいたしております。

それで、こういうセミナーは各区いろんなところでやっていると思うんですけども、ほとんどが、きょう、いい話を聞けたね、よかったね、じゃあ、さよならというのがほとんどではないかなというぐあいに思っております。そういう意味で、私どものセミナーは、講座を修了した後に会を立ち上げるということを目指しております。そして、毎年毎年シニアの会が立ち上がっております。そして、それぞれの会は緩い連携をしておりますけど、その講座の卒業者は累計で400人を超えました。これが一つの地域の財産ではないかなというぐあいに思っております。

そして、彼らはもともと川崎都民なんですよね。仕事で東京に行って、家に帰るのはそれだけだというような方々でしたけど、それでセミナーを通じまして地域に友達ができますと、最初は楽しく遊んでばかりいるんですよね。いやいや、ゴルフの仲間ができた、カラオケはした、酒飲み友達ができたということで遊んでるんですけど、これが不思議なことに、しばらくいたしますと、これは私はサラリーマンの性というふうに言っているんですが、遊んでばかりいてもつまらないね、何か地域につながりたいね、世界に役立ちたいねというぐあいに、だんだん、だんだんこう思ってくる方々が、私の経験からはかなり多くそういう方がいらっしゃいます。実はこのときがチャンスなんですよね。うまく地域活動への筋道を紹介してあげれば、一人が入れば、それと同時に仲間が入って行って、多くの方が地域活動に参加されるような、そんな姿が生まれております。

現実にやまゆりのスタッフもそうだし、区民会議の委員もそうだし、アルテリッカのボランティア、そ

れから、先ほどありましたしんゆり映画祭等々にも、そういった方々が実は参加をしております。それで、弁当当番をやったりとか、そういう下働きをしながら楽しく過ごされております。

それと同時に、麻生区にも立派なホールがいっぱいありますよね。そういう中で、やまゆりとしては違った方向を実は考えております。演じる人、それから、見る人という垣根を取り去って、サロン文化の創造というテーマで、歌声喫茶などの参加型のイベントを実は数多く実施をしております。

そして、その運営に当たりましては、現役時代にテレビ局にいたとか、いろんな意味で知識をもった方たちが、音響や照明などそんな面につきまして、やまゆりテックという技術集団をつくって、楽しんで自主的にサポートしていただいていると、そういうようなことも生まれております。

そういった意味で、まだまだご紹介したい事例がございますけど、その他には、麻生区だけにある、区民記者という組織があるんですけど、そういう方たちの活躍、それから、毎年、区民講師公開講座というのを、もう7回ぐらいになりますかね、実施をしておりますけど、これがネタが尽きないんですね。毎年毎年15人ぐらいの方が区民講師としてこういうぐあいにデビューをされております。そういうようなことを考えますと、地域は人材の宝庫というお話よく聞きますけど、実感としてその言葉を感じておるわけでございます。

それで、ここからは私の思いですけど、やはりポイントというのは、仲間づくりという仕掛けをどのようにするかということと、それから、楽しく活動するという環境をどのようにして維持するかということが、大変このボランティアということをこれから盛んにするためには、必要ではないかというぐあいに思っております。

それで、人生80年代ということになりますと、単にボランティアを集めるということだけでなく、団体と団体、それから、人と人、団体と人をつなげるという、集めるか、つなげるという地域コーディネーターみたいな機能が、これからこのボランティアというようなものを、これから麻生区で大きく発展するためには、大変必要ではないかなというようなことを、実際の経験の中から直感で感じておるというようなことでございます。

以上でございます。

市長：ありがとうございます。以前、植木さんにやまゆりの登録団体の『あさおナビ』ですね。

植木さん：ええ。きょうももってきましたよ。

市長：あれを見るとすごい数の、本当にすさまじい数の活動団体があって、麻生区の豊かさを物語っているんだと思いますけど。

一番大事なところが、最後、植木さんが言っていたように、その団体と団体とかが、人と人をつなげてというふうに、うまくマッチングの機能というのがもつともつと働けば、もったいない人材、世の中にか、麻生区内に物すごいいますものね。そういう意味では、僕、初めて聞きましたけど、やまゆりテックですか。

植木さん：そうです。

市長：いや、すごい。そういう何かすごいのができているんですね。

植木さん：その中には、もとテレビ局でいろいろそういう関係をやっていた人だとか、ビクターのそういうことをやっている人とか、とにかくいろんな人が世の中にはいるということをすぐ感じますわ。

市長：いや、これから、さっき区長に聞いたんですけど、この活動団体というのを登録しているのが、麻生区は600団体。

植木さん：670です。2番目が宮前区の230ぐらいですね。

市長：なんですってね。ですから、もう、ほぼ3倍ぐらい違うということなので、これはやまゆりの果たしている役割もすごく大きいし、これからさらにこの人をつなげる、団体をつなげるという、最近はやっていたPPAPみたいな、パイナップルとペンをつなげてねとかという、そういう、うんという機能というのがすごく大事じゃないかなというふうに思いますので、ぜひ、これからよろしくお願いします。

植木さん：よろしくお願いします。

司会：ありがとうございました。

ちょうど、今、団体と団体をつなげる、あるいは、映画祭の中でも団体との連携の中でというお話が出てきましたけれども、今度は新百合ヶ丘以外でもこういった芸術・文化資源があるということで、続きまして、「劇団民藝」様の平松様から、区内各地での芸術・文化活動の連携というのをテーマに、「区内各地の連携した公演制作」について発表をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

平松さん：皆さん、こんにちは。劇団民藝の私は制作部の平松と申します。どうぞよろしくお願いします。

では、説明させていただきたいと思います。

まず、劇団民藝についてですが、この劇団民藝の概要について、ここはじゃあ駆け足で説明していきます。

創立は1950年ですね。創立メンバーとしましては、もう皆さんのほうがよくご存じではないかと思うんですけども、滝沢修、宇野重吉、北林谷栄といったメンバーが1950年に創立しました。

劇団数、劇団員の人数ということですね、大体180人ぐらいですね。大体180人ぐらい。俳優さんが主なんですけれども、俳優さんが主、それから、舞台スタッフですね、演出ですとか、照明ですとか。あと、私どもは制作部と言っていますが、事務員ですね、がいます。

年間公演数なんですけれども、これが全部含めて、日本全国でやっておりますので、大体数字にして、年によって若干前後しますけれども、大体250ぐらいの公演を毎年やっております。

場所なんですけれども、これも北は北海道から南は九州、実は今は九州にちょうど旅公演に行っているところでして、今日は飯塚ですね、1時30分に開演ということでございまして、作品は、井伏鱒二原作の「集金旅行」、榎山文枝主演の舞台なんですけれども、今はちょうど九州でやっています。

場所は、その本公演というのは、私どもは東京の紀伊国屋サザンシアター、それから、三越劇場ですね、こちらで2週間弱ぐらいの期間にわたっての本公演を年間に5回ほどやっています。それが本公演なんです。

それで、次からは、その麻生区とのかかわりなんですけれども、創立1950年と言いましたが、麻生区、ちょうど左の写真をごらんいただきたいんですけども、今は麻生区黒川に稽古場及び事務所があります。こちらに移ってきましたのが1982年ですね。1982年に、それちょうど場所は、鶴川街道の駅で言うと黒川と若葉台のちょうど間ぐらいにありまして、事務所と稽古場がございまして。

そこでどんなことをやっているかといいますと、稽古場公演と言っていますが、本公演というと大劇場で割と大がかりな舞台になりますよね、料金もそんなに安くはないということで、地域の皆さんに

演劇により親しみをもって、もう2,000円、1,000円ぐらいの低料金で楽しんでもらえるようにということで、これは1993年からスタートしました。

いつも1年のうちで春とか夏とかいろいろその年によって違うんですけども、1回か2回、稽古場に大体100席前後の席を設けまして、そこに舞台も組みまして、ご近所の皆さんに、要は、下駄ばきで来ていただけるような演劇をということで稽古場公演を実施しております。

これはちょうど一番最近、ことしの2月に「をさの音」という三好十郎という劇作家、ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、その作品をやりました。このときは地元の囃子連の方にご協力をいただいたんですが、その話はちょっとまた後でいたします。

地域との連携の目的といいましては、そんな特別なことを考えていないんですけども、演劇文化の浸透といいましょうか。より地域の皆さん方に演劇を楽しんでもらいたいというようなことを考えて、稽古場公演といったことでやっております。

その地域との連携の事例ということで幾つかご紹介させていただきたいと思いますが、アルテリッカしんゆりですね、この間終わったばかりですね。いろいろお世話になりまして、関係者の皆さん、どうもお疲れさまでございました。

私どもは、今回2017年は「アンネの日記」という舞台を上演いたしました。「アンネの日記」はもう皆さん、これはご説明することはないと思うんですけども、ユダヤの少女のアウシュビッツのその悲劇を描いた「アンネの日記」ですね。「アンネの日記」を上演いたしました。

アルテリッカが始まったのは2009年だったと思うんですけども、そこから毎年毎年、上演させていただいております、ことしは「アンネの日記」を上演いたしました。

次は、麻生文化協会ですね。麻生文化協会さんの（民藝の女優を描くデッサン会）というのを毎年参加させていただいております。これどういうことかといいますと、絵のモデルさんってありますよね。普通はいろんな形で絵のモデルさんがいらっやいますけれども、主にその舞台扮装。例えば、舞台が沖縄の舞台だとしたら、その沖縄の民族衣装で出てきたり、そういった舞台扮装を描いていただくというようなことで好評をいただいております。右側の写真ですね。

では、次の地域との連携の事例、その次なんですけれども、これと和光大学さんとどんなことをやっているかということなんです。これご説明しますと、先ほど言いました稽古場公演のチラシ、チラシってございますね、皆さんも公演ごとにつくと思うんですけども、このチラシのデザインを和光大学さんの学生さんにやっていただいております。ということで、ちょうど麻生の交流カフェで和光大学さんの方と知り合いまして、そんな話がもち上がりまして、それが実現したということなんです。

どんな形でやったかといいますと、和光大学の学生さんに台本を渡して、図案を一人一人幾つか書いていただいて、それをコンペ形式で先生の指導のもと、それから、私どもの劇団員といろいろ話し合っ決めてということなんです。

左側の写真がそうですね。ちょうど今、白い服を着た学生さんがいますけれども、ちょうどその方のデザインが採用されて稽古場公演のチラシになりました。

右側の写真は、これ手前にいるのをちょっと見えづらいかもしれませんが、うちの劇団員なんです。劇団員がお芝居の前に、こんなお芝居をやりますと学生さんに案内に行っているんですね。そのことによってお芝居への理解が深まるというようなことで、学生さんといろいろ質疑応答などをさせていただいたんですね。

ほかにも和光大学さんとはチラシ制作のほかに、公演の運営のインターンということで、公演会場に来ていただいて、チラシを配っていただいたり、切符をもぎっていただいたり、というようなことで劇場の運営にかかわっていただくようなことも進めております。

続いてのお話はですね、先ほどちょっとお話ししましたが、ことしの2月にやりました稽古場講演

のときですね、劇中でお囃子、お囃子が奏でるということになりました、最初ですね、お囃子を実際にやっている方に出演していただこうと思ったんですね。でもそうしてたら、なかなか時間が合わないということで、出演はしていただけなかったんですけども、指導という形でご協力をいただいて、私どもの俳優はですね、実際に稽古をしているところに伺ってお囃子を覚えてたというようなことがありました。ちょうど右側の写真ですね。向かってちょうど右側の写真ですね。向かって左側、一番左の男の方と真ん中の女の子がお囃子の方。一番右の女性がいて、彼女は出演者の一人なんですね。そんなことで、実際にお囃子を習ったというようなことがありました。

左側の写真なんですけれども、あちこちで、図書館でも読み聞かせの会というのをやっているかと思うんですけども。劇団民藝でも、地域にいろいろ子育て世代の方がたくさんいらっしゃるんじゃないかというようなことで、女優たちによる読み聞かせの会というのを、昨年の第1回をやっていたんですね。最初はどうなることかなと思ったんですけども1回につき40人ぐらい集まっていたいただいて、結構、好評のうちに終わることができました。感想なんかを見ますと、絵本をただ読むというよりも、皆でせりふの部分を複数で言って、掛けあいのようにするんですね。そういうところが面白かったなということで。

もうちょっと、時間ですね。すみません、失礼します。では、駆け足で。

これからの提携に向けてということなんですけれども、地域で老若男女の方々が、いろいろ活動をされている方がいらっしゃると思うので、そういった方のワークショップに出る内容ということで、講義できたらなと思っております。黒川や多摩線沿線の魅力向上に向けて、そういった活動を継続させながら続けていければなと思っております。

以上です。よろしいですかね。ちょっと長くなりました、すみませんでした。

(拍手)

市長：平松さんありがとうございました。本当に劇団民芸がこの麻生区内にある、川崎市内にあるというのは、大変誇りになるところであります。本当にありがとうございます。

また、アルテリッカしんゆりにも毎年ご出演いただいて、今年のアンネの日記の主演女優さんが川崎市多摩区出身ということで、ついには劇団民藝の主役が川崎市出身というのは、何か本当にうれしかったですね。ありがとうございました。

特に地域連携のお話は、こんなにやっていただいているんだというのを、とてもありがたく思いました。囃子連の方達から、この一番右の女優さんは教えてもらっているんですか。

平松さん：そうです。

市長：これはすごい、いい話だと思ったのは、左側の絵本の読み聞かせは女優さんがプロとして、ある意味、読み聞かせて教えて、その逆バージョンですね。

平松さん：そうです。地元の方から教えていただいているんですね。

市長：だから、何かこの、お互いに教えあつてというか、ウイン・ウインというか、表現があれかもしれませんが、何かこういう形でつながるってすごくすてきなというふうに思いました。ありがとうございます。

もう一つ前のスライドを回していただくと、こうやって学生さんたちにも、こういうかわり方ですね。すごく学生さんのためになると思います。刺激になると思います。思ったのは、こういう学生さんたちが、

植木さんのところの、例えば区民記者とかの若手の記者さんとかになると、またこういうのを取材してとかというと、おもしろいかもしれませんよね。若い記者も生まれてくるとか、何かこう、いろいろなところがコラボすると、いい取り組みが生まれるんじゃないかなと。これはでも、素晴らしい取り組みを、いろいろやっていたに感謝したいと思います。

最後のスライドの中で、今後の連携の話、黒川や多摩線沿線の魅力向上に向けてというふうに書いていただいておりますけども、黒川の魅力向上という意味でも、すごいいいニュースが今年ありまして、それは小田急電鉄さんがかかわっていただいているというか、小田急電鉄さんのおかげで、読売交響楽団の練習場所が黒川にできるというふうなもの。これはまた新しい劇団民藝さんに続く、区民が誇りに思うような、そういう施設になるんじゃないかと思えますけれども。こういった魅力向上について、麻生区あるいは小田急沿線、多摩沿線の魅力向上について、小田急さんからちょっとコメントをいただけるとありがたいですね。

滝島さん：本日はありがとうございます。小田急電鉄で開発事務という、店舗ですとか住宅の開発をやっております滝島と申します。

今、市長にもいただきましたけど、実際に我々のほうとしましては、これから多摩線の魅力を向上することですが、今日いただいた、皆さんの芸術文化活動をいろいろやられて素晴らしいと思うのですが、その中で特に当社として、いろいろどういことができるかという意味では、新百合ヶ丘に日本映画大学ですとか、昭和音大さんの方のいろいろご協力はさせていただいておりますが、それ以外の駅。実は麻生区さんでいうと、百合ヶ丘、新百合ヶ丘が基本で、多摩線でいうと五月台、栗平、黒川、あと、はるひ野ですね。7駅あるのですが、ちょっと、正直言います、それ以外の各駅停車の駅は、今まで住宅の開発はさせていただきまして、お住みいただいているんですけど、なかなかそれ以上のことができていなかったというのが、当社の中でも反省でございます。

きょうも冒頭でお話をいただきましたけど、これから当社としても、電車にお乗りいただくだけではなく、いかに住み続けていただくかということ視野に入れまして、まさに今ここに書いてありますとおり、多摩線沿線の魅力向上ということで、今考えております。

その中で、やはり、ちょうど今川崎市さんから包括連携協定を結ばさせていただきました、その流れもありますし、当社としまして、実は今、下北沢の方の工事と、あとは登戸のほうも工事をやりまして、実は来年の3月にいよいよ、工事に約50年かけてしまったのですが、複々線化が完成いたします。そうしますと、かなり、新宿まで、もしくは千代田線を経由して霞が関のほうですとか、大手町の速達性が向上いたしますので、その一番時間短縮の恩恵を請うところで、実は、向ヶ丘遊園から先の川崎市さんのところになりますので、ようやく我々も本腰をいれて、市さんと連携して、いろいろな施策を考えようという状況でございます。

その中で、まさに今いただきました、多摩線沿線につきましては、特に住宅地の開発をやってきたのですが、特に黒川の部分は、本当に申しわけございませんというくらい空き地になっておりまして、かつ、今回たまたま読売交響楽団さんの方が、本来でしたら実は稲城のほうの山のほうにいられて、いろいろと練習場が老朽化されたというふう聞いておりまして、今回縁あって黒川の駅前にお越しいただいたということがございます。

我々からしますと、読響さんの方が来ていただくのと同時に、黒川駅前、すみません。空き地になっておりますけれど、いよいよ、いろいろと、それに連携した形で開発を考えると同時に、やはり読響さんが来られて、きょうも改めて多摩区の皆さんのほうで活動を聞かせていただいて、何か、これからそういった各駅の活動のご協力ができるかと。今までどうしても、わかりやすく言いますと、各駅でいうとマルシェがあったり、OXがあったりという何か、建物にくると大家さんですと言う形だったのですが、いかに皆さんと連携できるかという。これも正直今までやったことのない事柄なので、これからどういうふうにできるかと

いうことを、皆さんといろいろと汗をかきながら考えていきたいなと思っております。

市長：ありがとうございます。滝島さんから、すごくすてきなご挨拶をいただいて。

そういう意味では、本当にさっきの新百合の映画祭もそうですし、昭和音大さんという魅力的な学校も、あるいは地域にひらかれた大学がありますし、いろいろなところで魅力があるのが、これが全体として沿線の魅力向上になって、先ほどおっしゃられたように、ここに住み続けたいなというふうに、あるいは、これから新百合ヶ丘あたりに引っ越したいなというふうな憧れの町になってくるという、そういうものにつながってくるんじゃないかなというふうに思います。

これからもぜひ、川崎市との連携をよろしく願いしたいと思います。また、こういう地域で活動していただいている団体の皆さんとのコラボをぜひよろしく願いしたいと思っております。

滝島さん：よろしくお願いします。

市長：そういう意味では、連携という意味ではですね、あさお芸術のまちコンサートという意味では、いろいろなところをつないでいただいている。区民のいろいろな人たちが参加されてというふうな形で、私も昨年参加させていただいて、とってもすてきなコンサートだったんですけども、繋げるという意味でもいろんなご苦勞もあったでしょうし、進行しているんじゃないかというふうに思いますけれども、そのあたりのノウハウも含めてお聞かせいただけるとありがたいです。

丸山さん：あさお芸術のまちコンサート推進委員会なんですけれども、始めにごめんなさい、ちょっと訂正がありまして、一番最初、白井さんが歴史みたいのところありましたが、区役所ロビーコンサートじゃなくて、区役所ロビーで行われているあさおランチタイムコンサートというような名称です。すいません、ちょっと訂正させてください。

確かに狙いというか、目的はつないでいくという単純なキーワードだったんですね。そのつないでいくという中に、人と人、あるいは団体と人、地域と人、そして子どもと大人とシニアの、ありとあらゆる部分でつないでいけたらいい。もう、文化協会の菅原会長をはじめ、さまざまな団体様がおっしゃったように、演奏者だけが演奏するのではなくて、聴く側、植木さんがおっしゃっていましたが、そういう思いで来ました。

随分そういった意味では、本当に地域の方がコンサートに応募してくれるようになりましたし、またボランティアスタッフというか、委員も実は文化協会さんや皆さんと同じで完全に無償の実行委員というか、推進委員会の委員なんです、活動は。その皆がそれぞれ役割をもって、思いをもって活動してくれているおかげで今の積み重ねができています。特に私は、文化協会の会員でもあるんですけども、親子教室が一つの発想でした。それで、つまりどういうことかという、すごい結構重要なことなんです。夏休み親子教室というのは、全部の学校、あるいは市民に呼び掛けるんです。ですから、例えばある学校が出てくる、スクールコンサートに。単発で出てくる。どこかの団体が出てくる。その縦の線ではなくて、横の線をつなぐ。私はそれを、自分の学校につくるという意味で、ひしひしと子どもの声を聞いたんですね。出たいんだけど、友達がやっぱりできないとか。だから、子どもの呼びかけをしたり、大人の呼びかけを地域にしていって、そこで、例えばこの指とまれ、この指集まれという、そういう発想でこの推進委員会やっています。あるいは、民藝さんにもお願いして、窓ぎわのトットちゃんときは、駅長さんの帽子がないのでと、何かもう、気楽にお友達感覚で聞いて、教えてもらったりだとか、それから今度は田園調布大学とも連携してホールを借りて、そこでさせてもらうという、段取りをつくったりとか、いろんな会場を飛び出して、余りたくさんはいれないですけども、とにかく来た人が、会場に来た人が友達になって、あなたもいたのね、また帰っ

てそこでも会ったわねという、そういう会話ができたらいいなという思いでいます。

樋口さん、大丈夫でしょうか。

樋口さん：私からはとりあえず、今委員長からもありましたように、私も全くのボランティアで参加させていただいて、実は、個人的には私は防災や防犯のほうもういろいろやっているのですが、この文化活動に参加するというのも一つの私の大事な柱になっていますね。その支えというのが何かというとやりがいですね。ですから、このコンサート、委員会もこれだけ続けて来られているのは委員が、やはりそれなりのやりがいを感じているところがあると思います。そのやりがい作りを委員長がうまく、企画面ですとか、そういうところで作ってくださっているな、というふうに感じております。

市長：ありがとうございます。

本当に、聞いていると、非常にオープンマインドというか、繋がろうと言って、この指とまれっていうキーワードありましたけれども、あるいは友達のような感覚で民藝さんをお願いしちゃうとかという、何か非常にいいですね。どこにもバリアがない感じの、うちないから、何かあそこをもっているんじゃないのとか、そういう壁のなさというか、そういう気持ちというか、それがいろいろなものを結びつけてつなげている、一つのあれですね。丸山さんや樋口さんの人柄というのもあるのでしょうか、そういうマインドセットというのが、とても大事なんじゃないかなというふうに気づかせていただきました。ありがとうございます。

次の事例を発表していただきたい。

司会：それでは、続きまして今、住みたい街、住み続けたい街という話も出てまいりましたが、続きましてNPO法人しんゆり・芸術のまちづくりの白井様から、芸術・文化を生かした新百合ヶ丘の地域ブランド化をテーマに発表をお願いいたします。

白井さん：すみません。たびたび、今、お話をいただきましたので、あえてブランド化という言い方をさせていただきましたけれども、なぜこういったような言い方をするという話もあるかもしれませんが、以前から音楽のまち・かわさきというのが少しずつ定着をして市民もこの言葉がある程度は理解したり、あるいは地域の方もわかってきているのかなということがあります。ただ、この新百合ヶ丘というか、麻生区の芸術の街づくりというのが、果たしてそこまでいっているのかなというようなところがありまして、もう少しブランド化を形としてやっていったらいいのかな。

今、事例としていろんな市民の方と一緒にあっていらっしゃる方もたくさんいらっしゃいますし、少しずつは進行しているかなという気がしております。

細かいことはまたあれなんですけれども、やはりいろんな形のことを、先ほど歴史の話の中にもしましたけれども、そういった形の活動をしていく中で、私どもは、芸術のまちづくりのカフェということを通じて、今、参加していただいている方にもいろんな形で連携をしていただいたり、少し事務局のほうを少し勤めさせていただいておりますが、そこで芸術文化、情報発信という意味で少し形を整えたいなど。ただ、せっかく市長が来ていらっしゃるの、要望ではないのですが、区のほうからも非常に信用いただいて、私ども事務局等もやっておりますが、この事務局もうちの事務所の片隅でやっておりますので、これをもう少ししっかりした形にできればなという思いは伝えます。その中で、ホームページ等ですね、いろんな形で皆さんの活動の支援をさせていただいたり、その中で、これは私が後でいただいたものですが、音大さんのここにも先ほど申し上げた、音楽のまち・かわさきという、それからしんゆり芸術のまちといった、これは後援申請というのをいただいて、それをこちらで申請をいただいた方たちのものをPRボードというものを使っ

て、区内ですね、30か所くらいでいったり、それからホームページ等、それから最近ではイベントカレンダーというのを区内全域に配ろうということで、この中で行われている芸術活動を少しPRしていこうというような活動を行って、ブランド化を少し、しっかりしたものにしたいということもありまして続けております。フェイスブック等では、前からもずっとやっております。先ほど、イベントを通じてのPRの活動も、イベントブランド化の一つの方法になっているかと思えます。

もう少し、このアルテリッカもそうなんですけれども、ホールの中でやられているものは非常に素晴らしいプロが、素晴らしい芸術をやられていたりするんですけれども、外になかなか見えにくいということで、それをどうしたらいいかというようなことで、これをフェア、あるいはうちのほうで少しご支援いたりしなければいけないのかもしれませんが、広告だとか、PRをするための場をどうしたらいいかというようなことを議論させていただいて、ポスターの一枚もはれないというような状況でございますので、この辺どうしたらいいのかなというようなことを考えております。

それから、向上に向けてということで、都市部や周辺地域でもいろいろな文化活動、あるいは施設がありますが、これを地域で、この新百合ヶ丘、本当にこれから芸術文化を、他の地域との差別化という言い方はちょっとあれですが、そうしながら皆さんが住みやすいということも含めてちょっといい環境づくりをしていきたいなと思えます。

にぎわいというのも、実は商店がいっぱいあればいいというところもあるのですが、なかなかそのままにしておくと、非常ににぎわい、閑散になっているようなところもありますので、このいい芸術や文化遺産をどのように活用して生かしていけるかというようなことは皆さんとともに課題としていければと思っております。

目標が、これちょっと書きましたのは、目標がある街は楽しくなるね、と。目標というのは、芸術でいうことを少し皆で改めて考えていきたいなと。環境がいいというのは、この麻生区は非常に緑の環境でしたり、安全安心ということで、非常に評価が高いのですけれども、もう一つプラスで豊かな生活という中で、実は昨年区民会議の中で、区長のほうに提案をさせていただいたのですが、若い世代が住みやすいと言う中で、いろんなアンケートを取りました。そうすると、ほかの地域から来られる方の動機が、子育てがしやすいとかですね。先ほど言った、緑が豊かであるとか、あるいは安全、安心であるということ。芸術という部分が若干まだ浸透していないなと。芸術文化があるからここに来ましたというのが少しまだこれからというところかなというふうに思いましたので、きょうはちょっとブランド化というのを皆さんで意識しながら、少しここから発信できればということで、ちょっと提案をさせていただきました。

以上でございます。

市長：ありがとうございます。

ブランド化ってすごい大事な話ですけど、確実に新百合ヶ丘の、芸術の街という雰囲気、ブランド観は定着してきているように思いますし、またアルテリッカしんゆりなんかもそうですし、昨年末もお邪魔しましたけれども、kirara@アートも、あれもすごい定着したんじゃないかと思えますし、先ほど白井さん言われた、中でやっているとなかなか見えづらいのだけれども、外でああいうことをやるとすごくわかりやすいという、あのイベントは物すごく感激しました。何か、歩いている人たちがそこをぱっと立ち寄っただけでも、皆心が明るくなるという感想をですね、何か常に動きがあるとかというふうになると、もっともっと、楽しくなってくるんじゃないかなと思いました。

PRの部分については、ぜひそれ皆で知恵出し合ってですね、工夫したいなと思えます。先ほど、しんゆり映画祭の時にはポスターを掲示してとかというふうなものもありましたけれども、何かこういうふうな形でどうやったら、いい形の広告ができるかという。景観は大事にしながらも、でもしっかりとPRできるような形というのが、どういうふうにしたらいいのかなというのは、皆の知恵の出し合いだというふうに思いま

すので、ぜひやっていきたいなというふうに思います。

それから、皆さんかわさきイベントアプリというのができたのはご存じですかね。スマートフォンで登録していただくと、自分たちの活動を市内の人たちに知らせたいといっても、紙媒体だとなかなか届く先があるなので、ということでイベントアプリというのを作りました。後ほどぜひ、かわさきアプリというふうなコーナーから、かわさきイベントアプリというのができましたので、それをぜひ皆さんに使っていただきたいと思います。これをやるとですね、例えば私、宮前区に住んでいます、というふうに打って、宮前区の情報だけを知るとか、あるいは宮前区、麻生区、多摩区の情報を欲しいです、というふうにチェックしますと、その情報が出てくるようになってくる。あらゆる自分の好きな分野を登録しておけばそれで出てくるような形になりますので、ぜひそんな形でもきょうお集まりの皆様さまにさまざまなイベントみたいなものを市内外に伝えるいいツールになると思いますので、ぜひご活用いただきたいなというふうに思います。

さて、先ほどブランドというので、アルテリッカも大きなブランドと言いましたけれども、ここでも事務局というか、大きな役割を果たしていただいておりますけれども、文化財団池田さんのほうから少し、ことしのアルテリッカも含めて、ブランドのことについてでもいいです、少しご発言をいただければと。

池田さん：大変お世話になりましたですね、盛況のうちに終わることができましたけれども、オペラから落語までというのがキャッチフレーズで、さまざまな分野の芸術を網羅していくということで、そういうものを区民の皆さんをはじめ、内外にもっとアピールしたいということでございますが、一つ悩みがあるのが、やはり一つの音楽祭ですとか、演劇の祭りとか、そういうのではなくて、いろんなものができているものですから、何を売りにするのと言われてときに全部ですと、あらゆる分野ですというような言い方をどうしてもせざるを得なくて、クラシックもあります。ジャズもあります。それから、演劇もあります。そういう言い方になってしまうので、内外にアピールする場合に、質の高いものをやっているということなんですけれども、ブランドという意味ですね、アピールが難しいのが若干あるかなとは思っています。ただ、内容自体はおいでいただければ、内容はいいというアンケートも多いですから、来ていただければいいですけども。ということで、昨日もちょうと別の会議で言われまして、南武線のほうから来ないねと言うのですけれども、これは登戸の壁と私言っているのですけれども、同じテーマですけれども、川崎市ではございますけれども、小田急線沿線の方には非常に浸透してある程度の中身がわかっていたかというところですけども、南武線については、やはりそこで一回乗りがえないといけないということもございまして、なかなか麻生多摩の方って、私も多摩にそばにございまして、聞いてみたのですけれども、川崎に行ったこともないという人が結構いらっしゃるという状況もございましてですね、そういう中でどこまで、ブランドを高めていって、遠くからも来ていただけるようにできるか工夫しなければいけないと。

後は、やはり麻生区も文字どおりでございますけれども、地域密着ということでやっているわけですが、ブランドということであればですね、東京とか横浜のほうもそうですけれども、青葉区とか結構来ていらっしゃっていますので、そういうところにももうちょっとアピールしていきたいなというようなことを考えております。

以上でございます。

市長：ありがとうございます。

アルテリッカ、市の南部のほうからなかなかという、ありましたけれども、これは大事な話なのでけれども、僕はそこまで気にしなくてもいいというか、アルテリッカしんゆりそのものがすばらしいものであると、それこそ小田急沿線上、町田からも来る、新宿からも来るという、都内からも、新百合ヶ丘に皆で見に行こうぜというふうな話になるので、それを聞いて、じゃあ南部の人たちもこっち行ってみようかというふうなことになるのだと僕は思うので、何というかそこにすごく、市長としてこんなこと言っているのかとい

うのありますけど、しかしでもそういうことが全体としての波及に確実につながると思うので、僕はそれだけの魅力のあるアルテリッカしんゆりになってきていると思いますし、これをもっと皆の力で頑張っていくべきなんじゃないかなというふうに思いますね。

アルテリッカしんゆりの実行委員長の佐藤忠男先生が言われていたのですけれども、とにかくこの新百合ヶ丘の大きな芸術の街になっていくターニングポイントになっていたのは、やっぱり昭和音大さんの力が物すごく大きいと。ここはやっぱり日本映画大学さんもそうなんですけれども、昭和音大さんがここにキャンパスを移したというのが、これはもう劇的な変化を生んだというふうにおっしゃっていたんです。そういう意味では、新百合ヶ丘のブランド力、大いに高めていただいていると思いますけれども、昭和音大さんから家安さんと福地さん来ていただいているので、どちら側からでも結構です、コメントいただけたらと思います。

家安さん：それでは、3分だとおっしゃったので3分でさっとやりますが。ブランドの前の一つだけ言わせていただくと、マッチングとおっしゃったので、実は昭和音大は1, 500人くらいのものがあります。やっぱり今、大変厳しいです。学生の住まいとして、この辺の人もいますけれども、やっぱりアルバイトしたりするんですけど、奨学金だって結構みんな借りています。全国平均で奨学金を半分くらいの学生が借りているというぐらいのことになっているんですが、一つは、大分住み方が変わってきて、お子さんが大きくなって、シニア層が残って、家が空いているところって結構あるんだというふうに聞いているんです、部屋がですね。そういうところに、例えば麻生区が例えば仲介していただいて学生が安く住めるとか、そうすると、ただ部屋を借りるだけじゃなくて、シニア層と若者が音楽を通して話ができますし、非常に交流もできて、今度こんなコンサートするんだよという話があったら、今度来ませんかなんて話ができると思うので、本当に音楽家の卵が住むまち、映画のほうもそうですね、映画を目指す学生の卵が、学生たちが住むまちというような、住むというところに一つマッチングができるんじゃないかなと思ってまして、ちょっとまた考えていただけたらと思うし、我々も力を出したいと思います。

ブランドのこと、一つ言いますけど、昭和音大はもともとイタリアオペラをベースにして発展した学校なので、イタリアものがすごく多いし、イタリアっぽいんですよ。ここに来たときも思ったのは、外観というか、何とかコードといいますよね、景観コードというのですが、非常に色が淡い、ベージュとかピンクとか、イタリアンカラーに近いですよ、すごく。まちはもう既にイタリアのまちという感じがするので、これは僕らの先輩がもう言ったことかもしれませんが、やっぱり目に見えるものをブランド化しなきゃいけないと思ったんですけど、一つはやっぱり食べ物と服飾、二つか、食べ物と服飾だと思うんですけど、食べ物はやっぱりパスタとか、競作でいろいろつくってみたらどうですかね。新百合に来ると、いろんなパスタの競作があって、お店でも一つくらいは出すとか、そういうふうに、ここへ来るとパスタのまちだみたいな感じにしてもらえると非常におもしろいかなと。別に音楽関係ないんですけど、ただ、イタリアのつくりというのは非常に人間を開放的にしますし、魅力あって、人が来ますよね、そういうこともできますし、いいんじゃないかなと思っていました。食べ物が一つ、ブランド化すると。

それからもう一つ、服飾のことですけど、やっぱりイタリアのまちに行かれた方はよく見る、小さいクラフトの店、クラフトが多いですよ。手づくりのまちが、やっぱり革製品をつくったり、そういうブランド化を、人を住ませて、職人を住ませて実際に店を出させて、このまちを結局ブランドのまちにするというのは非常におもしろいんじゃないかなと。全体のトーンはイタリアだという感じで、明るくいけたらおもしろいんじゃないかなとずっと思っていました。なので、ブランドのテーマとして、イタリアンというのはどうかとちょっと思ったので、ちょっとお考えいただけたらなと思っています。

市長：ありがとうございました。イタリアですね。なかなかコメントに困る感じですけど、しかし、実は食

と音楽というのは、すごく組み合わせとしては大事で、この前白井さんも、去年もしんゆりマルシェ、しんゆりマルシェなんかは、岩倉さん、とても食べ物と音楽とか、ライフスタイルというか、そういうものがうまくコラボレーションして、あそこにこれだけ子どもがいっぱいいいのかというぐらい、全く、これだけ若い人たち、子どもさんたちが住んでいたのかというほどあふれかえっているのを見ると、ここの世代を音楽だとか芸術活動だとかというのをひっぱってくる意味では、家安さんがおっしゃった食べ物とか、何かそういうものというのは、僕は大事なんじゃないかなという、引き合わせる大きな要素になるのではないかなというふうに思います。

先ほどの佐藤先生が名誉学長を務めておられる日本映画大学から、寺川さんがお見えになっていますので、ぜひ大きなブランドになっていますので。

寺川さん：そうですか、どうもありがとうございます。先ほど民藝の説明をした平松君、彼はうちの卒業生です。脚本ゼミを卒業しております。それから、先ほど福田市長からご紹介いただいたP P A P、あれはうちの俳優科の中退生です。彼もテレビに出るようになるまでには20年近い年月がたっています。

私どももここへ来て随分になるんですけれども、今、こちらで芸術のまちづくりとか、川崎市は音楽のまちづくり、映像のまちづくりというのをやっていらっしゃいますけれども、こういった芸術文化のまちづくりをやっている地方自治体というのは、区役所の方に調べていただいたら80以上あるんです、日本全国に。その80以上ある全国の中で、どれだけ麻生、新百合ヶ丘の芸術のまちづくりを際立たせるかというのが、これから私たちに課せられた課題ではないかというふうに思うんですね。それは一つには、ブランド化が必要だというふうにも思いますし、芸術であるとか文化であるというものは、ただそこら辺に、野に置いておけば自然に芽が出て花が咲くというものではありませんから、やはり人がそういうものにちゃんと水を与え、肥料を与えて育てていかないと、そういう芳純な香りのする芸術の花は咲かないというふうに思います。でするので、それをこのまちの中でなすためには何をしなければいけないかということを、私は私なりに常日ごろ考えているんですけれども、芸術のまちづくりと並行して、商売繁盛のまちづくりをやらなきゃいけないんじゃないかなというふうに、最近思い始めました。それは言うなれば、中世の時代から、芸術というものはちゃんとパトロンがいてつくられていくものなんですよ。ということは、このまちの中にそうやったスポンサーの人たちも養成していかないといけないんじゃないかなというふうに思うんです。それをやるための方策は一応考えてはおりますけれども、それを言うと長くなりますからきょうは省略します。とりあえずそういったスポンサリングですね、それを芸術的な活動をしている皆さんと結びつけていくのがNPO法人の仕事じゃないかなというふうに私は思っています。

先ほど、しんゆり映画祭の方からお話がありましたけれども、やはり続けていくには、だんだん先細りになっていく状態が、今、このまちの中にはありますね。例えばイルミネーションイベントにしても、初回よりはずっと今のほうがお金を集めるのに大変な思いをしているということです。ということは、やはりどうしても繁盛しなきゃいけない。このまちと、例えばたまプラ、二子玉を比べた場合に、年間の商業施設の売上額というのは、5割から6割ぐらいなんです、他のところと比べた場合に。ということは、まだまだうまくすると伸びしろがあるということです。そうやって得た利益を芸術のまちづくり、そういうものにちゃんと還元していただく、そういうシステムをつくっていかねばいけないんじゃないかなというふうに思っています。

しんゆり映画祭の話をちょっとだけさせていただきますけれども、実を言うと、しんゆり映画祭というのは、私どもの学校の創始者、今村昌平が、職員からぜひ新百合ヶ丘で映画祭をやってほしいという、そういう話を受けまして、高橋市政のときに市長に会いにいったんですね。新百合ヶ丘で映画祭をやりたいと。最初は、国際映画祭をやるはずだったんです。国際学生映画祭をやって、次の年に市民映画祭をやって、それを隔年ごとに繰り返していくということを計画したんですね。川崎市はそれについての事業計画書をつくり

ました。電話帳ぐらいの厚さがある事業計画書です。それが日経新聞に写真で出ました。川崎市はいよいよ国際映画祭をやるぞというのが新聞の記事に出たんですね。ところがその後でバブルが崩壊して、国際映画祭がなくなって、市民映画祭だけが残ったのがしんゆり映画祭なんです。ですので、本当は国際映画祭がやりたかったんですね、今村さんは。私は、新百合ヶ丘、この麻生区界わいであるならば、国際映画祭はできると思います。なぜかという、私たちの学校が開校した当時、日本映画学校ですよ、大体1年に40人ぐらいのアメリカの大学生が日本映画を勉強しに来ました。2年ぐらい連続して。そのときに、泊まる場所がないからホームステイでお願いしたいということで、募ったわけです。そうしたら、物すごい数の方がホストファミリーとして手を挙げてくれました。皆さん全員英語ができるんです。ですので、この近所にはそういう方がいっぱい暮らしていってらっしゃるので、国際的なことにも十分に対応できるんじゃないかと思います。ちなみに私は中原区民なので、英語はできません。

そんなことで、まだ新百合ヶ丘には、これから発展していくだけの芽があります。なので、このまちのことを川崎市の皆さんも十分に目をかけていただいて、これからもこのまちのためにいろいろとご尽力願いたいというふうに思っています。最高のまちづくりが多分新百合ヶ丘ではできると思いますので、どうぞよろしくをお願いします。

市長:ありがとうございました。とても大切なことを幾つもおっしゃっていただいたと思うんですけど、芸術といわゆる経済というのは、これはもう密接不可分で、商業的に元気なところというふうなのが、それがいい形で還元されて文化芸術のほうに回っていくという、そういういいサイクルをこのまちではできる伸びしろがあるというふうにおっしゃっていただいたというふうに思います。ぜひそれに向けて、私たち、頑張っていきたいというふうに思っています。ありがとうございます。

今、寺川さんのお話で、音楽のまちを標榜している市区町村は80以上あるというふうに。

寺川さん:いや、芸術文化のね。

市長:そうですね、あるというふうにおっしゃいましたけれども、その他地域との比較も含めて、こうやってプロモーションしていくというふうなものはとても大事な話だと思いますけれども、株式会社プレルディオさんからも、お二人、きょうは来ていただいておりますので、そんな観点からブランド化ということ、プロモーションという、他地域との差別化というのですか、全部何か丸投げしているような、最後、締めになっちゃうかもしれませんけど。

それで、ごめんなさい、4時30分が予定時刻だったんですけども、私がしゃべり過ぎているんだと思います、申しわけありません、ちょっとオーバーしていることをお許しいたいて、よろしく願いいたします。

武井さん:今、寺川さんがすばらしいお話をされた後で、また諸先輩方がすばらしいお話をされた中でお話しするのが大変心苦しいんですけども、昭和音楽大学の関連会社のプレルディオの武井と申します。同じく森です。2名で参りました。よろしく願いいたします。

ブランド化というのは非常に大きなテーマで、昨日、岡村さんからお話しいただいて、それについてぜひということなんですが、いろいろ私なりに考えたんですけども、そもそも弊社は音楽大学を卒業してすぐに食べていける環境がなかなか日本は整っていない中で、そういった若い子たちを、何とか一人前になるまで応援していこうという趣旨で、平成14年につくられた会社です。そんな私も、実は声楽を勉強して昭和音楽大学を卒業しているんですけども、やはりイタリアに留学して帰ってきたときに、やはりそういう、なかなか食べていくことというのは、非常に社会との繋がりでですね。というのは、なかなか自分一人では難

しいという環境を痛切に感じ、この会社でそういった若い子たちを応援したいという思いで現在も仕事をやらせていただいているんですけれども。

ブランド化というところにつながるかどうかはちょっと置いておいて、音楽会の企画実施を多く手がけさせていただいているんですが、その中で、主催事業として、若手をまず外に出すということで、昭和ミュージックカフェというコンサートを、15年目、ことし迎えるんですが、そういった活動を継続しつつ、年配の方達が、やはり一緒に楽しんで、健康になっていただきたいという思いから始めています、「オペラ歌手と童謡を歌う会」というのを、毎月ユリホールで開催しているんですけれども、例えばアンケートを必ずコンサートなんかはとるんですが、その際、非常に年配の方達ですね、新百合の特にお客様の特徴だと思いません。遠慮せずに、いろんなことを書いてくださるんですね。その中で、例えばなんで3月なのに「仰げば尊し」を歌わないんだとか、そういったご意見をいただいたり、非常に私どもからすると、ああそうか、確かに昔の方は「仰げば尊し」だよなみたいな、そういったことを勉強したり、またそのコンサートを始めるに当たって、あるご婦人、おばさまが、私のところに来て、「きょう初めて口を開いたのよ」と。一人暮らしですね。「なので、きょう、2時、この会をととても楽しみにしていたの」ということで言われたのが2011年の初めてやったときだったんですが、そのご意見をいただいた際、もうこれは必ず継続しようということで、現在、7年目で、次が6月が50回目になるんですけれども、そういった活動をさせていただいています。

その中で、地域との連携という意味で、さらに受託をしたり、受けたりしている活動が、まさにアルテリッকাশィンゆり、こちらは菅原先生の団体、麻生童謡を歌う会の皆様とも一緒に共演させていただいてやらせていただいて、5年間、続けてやらせていただいております。また、kirara@アートしんゆりですね、こちらの点灯式でも、やはり先ほどほかの方からありましたが、外に向けて発信するというのが、なかなかアーティストを育てるという意味でもとても必要なことなんです、現実としてはかなりやっぱりハードルが高いところがありまして、ただ、今の若い子たち、昔の大御所の方たちとはまたちょっと違うロジックという考えがあったんですが、今の子たちはそういうのを全く抵抗なく、ぜひやりましようよと。もっとこういうことができますよというのだとかを逆に提案をしてくれたり、そういった今、考え方が、若い子たちは備わってきていますので、ぜひそういう活動もしていきたいというふうに思っております。

なかなか育てると稼ぐということをイコールにするというのが永遠のテーマで、まさにそこに取り組んでいるのが弊社なんですけれども、その中でやっぱりパトロンも、もちろん昔でいうパトロン、今で言う支援してくださる方、本当に、日本はどうもパトロンという言葉がネガティブなイメージが割と強いんですけれども、本当にそんなことはなくて、ぜひ応援していただくという意味では、どんどん発信を絶えずしていく、そして川崎から、新百合ヶ丘から育ていくアーティストをより多く出して、結果、彼らが一流になったときにまたここに帰ってきて、そしてそれがゆっくりとブランド化していく、ひとつ礎になっていくんではないかなというふうに思っております。

市長：ありがとうございます。本当であれば、ここでまたいろんなディスカッションをする予定だったんですけれども、既に一巡した段階で時間を15分、20分オーバーしてしまいまして、これでもうちょっと締めさせていただきたいと思うんですが、今、武井さんからお話があったように、学生と、それから高齢者の、本当にきょう一日初めて口を開いたわという人たちのつながりというふうなものは、すごくありがたいし、うれしい取り組みだというふうに思いました。

岩倉さんが今実行委員にもなっていていただいておりますけれども、かわさきジャズ、家安さんもそうですけれども、テーマは「ジャズは橋を架ける」というテーマでやっているんです。ジャズはいろんなものを橋を架けて、人と人に橋を架けたりとか、異文化と橋を架けたりとかというふうな、あるいは世代を超えて橋を架けたりとか、いろんな橋の架け方があるよねという、それをつなぐという意味で、音楽だとか芸術だとか

というのはその力があるということを信じてそれをやっているわけですが、多分きょう集まっていたいて、交流カフェで、今まで何となく、隣の人を知っていたけど、それがどうつながるんだろうというふうなのをやり始めていただいて、またその豊かさが、あるいは膨らみ方というのが出てきているというふう思うんですね。さっきの寺川さんのお話なんかを聞いていて、ああそうだなとかという。皆さんのその話が、何かこういう方向にも、こっちにも行ける、あっちにも行けるというふうなのが出てきたと思うので、こういうのをもっともっと広げていくと、麻生の活動している、あるいは今活動していないとか、参加していない人たちというのもつなげられる伸びしろがあるんだというふうに思いました。ぜひこれからもこういう輪をどんどん大きくしていただいて、市民を巻き込んでいくというふうなことをしていけば、住み続けたいと、あるいはここに住んでみたいというふうな憧れのまちになっていくんじゃないかなというふうに思っていました。

本当にきょうは短い時間でありましたけれども、大変私自身も勉強になりましたし、次のまた文化芸術施策に展開する上で大きな知恵をいただいたような気がします。ご協力いただきまして、ご参加いただきました皆さん、そして傍聴いただいた皆さんにも心から感謝申し上げます、一言お礼の挨拶をさせていただきたいと思います。本当にありがとうございました。

司会：まだまだ話は尽きないかと思いますが、本日はこれにて閉会とさせていただきます。

最後に、参加者及び傍聴者の皆様に幾つか連絡事項がございます。

初めに、受け付けの際にお渡ししましたアンケートですが、お帰りの際に出口にいる職員にお渡しいただければ幸いです。

また、お車でお越しの方、会場の外にございます認証機に駐車券をお通しいただければと思います。

なお、お時間の都合により発言できなかった方などございましたら、市長への手紙というものもございますので、ご意見、提案などをいただきたいと存じます。封筒をご用意しておりますので、ご利用ください。

以上が連絡事項になります。

これをもちまして、第29回区民車座集会を終了させていただきます。